

台湾パイワン族貴族家の「家名」と「家族頌詩」

曾 有欽¹⁾ 著
周 俊宇²⁾ 訳

The “kina laimaiman” and “sisusuan ta kina laimaiman” of Paiwanese aristocracy, Taiwan

Ubalat Pukiringan
JHOU, Jyun-Yu

一、はじめに

パイワン族は、台湾にある16族の先住民族のなかで、二番目に人口の多い民族であり、主に台湾の南部と東南部に居住している。パイワン族には厳格な階級制度があり、大まかにパイワン族の集落の首長である頭目（mamazangilan）、貴族、勇士、平民の四階級に分けられる。なかでも、貴族系統とは、頭目家との親疎によって、さらにその家格が決められるという序列性がみられる。

伝統的なパイワン族の集落には、この階級制度があるため、男女、家族に関わらず、全てのものがより上の階級を目指し努力する現象がみられる。なかでも婚姻は自己の身分を流動的なものへ変化させることができる最も大きなメカニズムとなる。女性の場合、貴族や平民を問わず、婚姻による自己の身分的昇進のため、貞操を守ることは一般的であり、男性はというと、貴族令嬢からの好意を獲得すべく、狩猟を学び、勇士となるよう努力する。パイワン族の生命観は、このような婚姻観に影響されているのである。

パイワン族の言語が文字化されるまで、民族のあらゆる物事や現象を口頭で朗唱し記憶するという方法は、人々が生活の中で馴れ親しんだものであり、そこから生まれた口承文芸は、パイワン族の言語において極めて高い芸術的価値を有する。口承文芸は、詩歌などの文学の性質を取り入れており、内容をより

1) 台湾パイワン族伝統名Ubalat Pukiringan。台湾屏東県賽嘉小学校校長、国立台湾師範大学大学院文学研究科台湾語文研究専攻博士課程

2) 東京大学大学院総合文化研究科・博士課程

覚えやすくなるようにしている。この口承文芸は、ある意味で現代人の発想を超えたパイワン族の独特な文学となっているのである。

パイワン族の階級意識と社会的価値観は、まさにこのパイワン族文学を表現豊かなものにさせている。パイワン族の口承文芸には様々なジャンルがあるが、なかでも「勇士頌詩」na rakac a parutavak (勇士礼賛詩)³⁾、「男女情詩」sy pagagaljugalju (男女恋愛詩)、「結婚頌詩」sikipaukukuz (結婚礼賛詩)、「部落頌詩」paketu (集落頌詩)、「家族頌詩」sisusuan ta kina laimaiman (家系礼賛詩)、「亡者祭文」cagit (故人祭文)、「神話」milimilingan (神話)の七つは、文学性の富んだ文化的価値が高いものである。

「家族頌詩」sisusuan ta kina laimaimanは、貴族の家柄や家名の尊さなど、その特別性を賞賛するものである。また、「勇士頌詩」、「結婚童貞頌」(結婚貞操礼賛詩)、「亡者祭文」、「祭祖靈頌」(祖霊祭詩)、「部落詩」(集落詩)などでも、自分の家系の歴史と偉大さをアピールするために、必ず先に自分の「家名」を朗読し、賞賛するのである。

Ngadan na umaq (パイワン族家名)とは、パイワン族の各家族の苗字のことである。パイワン族の伝統名は、「家名」(または「家号」、家族名)と個人名からなる。「家名」は個人名の前にあり、個人名は「家名」の後ろにつけられる。例えば、伝統名がUbalat Pukiringanの場合、Ubalatは「家名」であり、Pukiringanは個人名となる。伝統名の付け方は一定の基準があるが、家格相応なものを付けなければならない。なお、パイワン族は血縁関係を非常に重視しており、「家名」を後世につなげている。そのため同じ集落に、同じ個人名を持つ住民は多いが、その「家名」に沿って遡っていくと、その人の身分や家格などの序列を見分けることができる。

パイワン族社会において親しまれている次のような詩歌がある。「Lulimay tima su inaqama kususna samiamiling (君はどの家族の出身だ? 君はなんて素晴らしいんだろう?) Lulimay izuwnia semekel sala Ubalat (私の家族はUbalatだ。)」これらは古典的な見合いの詩歌であるが、相手への挨拶や賞賛の意味が含まれている。詩歌の情景としては、成長した男女がまだ婚姻関係にないなかで、双方の両親のもとで対面し、家格相応な婚姻関係となれるよう互いに愛情を育ててほしいというメッセージがあるのである。したがって、

3) 本稿では、文芸の形式などに関わる専門用語に関しては、初出の際に日本語訳を付記し、以降はカッコつきの中国語の原表記とする。

歌詞には、自らの「家名」を通して自分の出身をアピールするような内容が含まれる。

本稿において「家族頌詩」sisusuan ta kina laimaimanはキーワードとなる。パイワン族の口承文芸において「家名」kina laimaimanが賞賛されている作品について、本稿ではすべて「家族頌詩」と定義する。さらに今回の検討を通して強調したいのは、パイワン族の口承文芸の「家族頌詩」は、一つの独立したジャンルとして見なされるべきでないことである。なぜなら、図1で示されるように、パイワン族の口承文芸のほとんどにおいて、その本質は貴族の「家名」を賞賛する内容だからである。これは本稿の問題意識であり、研究の動機でもある。

なお、台湾政府は2005年に先住民の表記システムの計画を発表し、口承文芸も文字化の時代にはいった。本稿で引用されたパイワン族の口承文芸作品は、すべてその表記システムに基づき文字化されたものである。

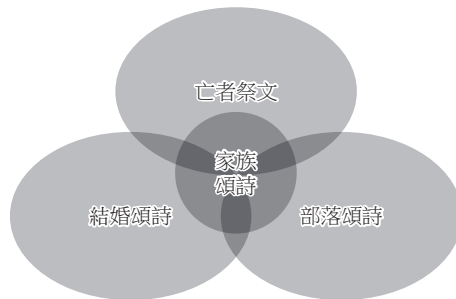


図1：パイワン族の口承文芸のなかの「家族頌詩」

二、パイワン族の「家名」制度

「家名制度」（別名、「家屋連名制度」という）はパイワン族のすべての家系の構成、継承法則、婚姻方式と密接な関係にある。パイワン族の家系には、「家族」cauvau・「家屋」uma・「家名」nadan naumaとの三つの要素が含まれるといわれる。そのなかの「家名」だが、パイワン族において、二つの意味がある。一つは同じ家屋に居住している家族が共有する集合の苗字のことであり、常に出身を見分ける記号として個人名の前に置かれる。もう一つは空間的概念であり、集落における家屋の位置を示す機能がある。「家名」の範囲は、基本的に一集落に限られるため、同じ集落に同様の「家名」が重複するような事態

は起こらない。(日本統治期の強制移住政策によるものは例外である)一般的に、パイワン族の「家名」の名付けには、形容詞が用いられることが多い。ある一族がどのように「家名」を選択し、決定づけた由来等についての検討も重要だが、本稿の研究目的ではないため、ここでは割愛したい。

「家名」は先祖がこれまで歴代で使用してきたものをそのまま用いるのがほとんどであり、新たに名づけることは極めて少ない。また、「家名」が確立すると、家系が断絶したり他の集落に移住しない限り、自らの「家名」を変更することはない。

「家名」の伝承と家屋の維持は、常にパイワン族の家系の伝承制度において、最も関心が持たれるところである。それは第一子に継承が認められており、唯一な後継者となるからである。また、第一子の弟妹が結婚すると、その弟妹が他の家庭の第一子と結婚し、その配偶者の親の家屋や「家名」をそのまま継承する場合以外、ほとんどが新しい家屋を建造し、また双方の親の互いの合意を経て、新しい「家名」を決めなければならない。

また「家名」は、自己の階級的地位を表すシンボルであるため、頭目の「家名」は一種の尊さを示す象徴となる。そして、その一族の財産は同様に第一子により継承されなければならない。「家名」はパイワン族社会において、身分を表すものであるため、他者を名指す際に、「某家の某様」というように呼ぶことが一般的である。例えば、筆者の姓名はUbalat Pukiringanであるが、Ubalatは「家名」、Pukiringanは個人名であるため、同じ集落には、Pukiringanという個人名を持つものが何人もいても、「家名」により、その出身が分かるのである。

パイワン族人には「姓」の概念がないが、これまで述べてきたように「家名」の概念がある。パイワン族のアイデンティティの構成は、まず「私は何々家の何々である」という認識があり、次は集落の名称となる。「家名」は家屋が建てられた後に名付けられるため、往々にして記念的要素や将来への期待が含意される。伝統的には、居住地を変更し、異なる家屋に行くとなると、自分の「家名」を変えないといけない。まさに婚姻はその仲介的な儀式となるのである。

筆者は台湾の屏東県三地門郷にてフィールドワークを行い、各集落の頭目に「家名」について調査を実施したが、その結果を表1に示している。

表1 屏東三地門郷各集落の頭目家の「家名」

集落名	頭目家の「家名」	
大社村	Talimalau (頼家) Demalalad (盧家) Kagangilang (何家)	
徳文村	Demalalad (戴家) Kazangilang (藍家) Galang (陳家)	
達來村	Taruzalum (陳家)	
馬児村	Ruladeng (柯家)	
賽嘉村	Pacekel (楊家)	
口社村	Tangiradan (田家)	
安坡村	Vavulengan (劉家)	
青山村	Demalalad (王家)	
青葉村	Mavaliw (頼家) Ruladeng (楊家)	
三地村	Pulidang (婦家) Ruluan (謝家) Pacekal (包家) Taukadu (陳家) Pakedavai (包家)	
フィールドワークの実施地：屏東県三地門郷の各集落 実施者：潘勝富 実施日：2014年4月2日		

上記の表から分かるように、異なる集落同士においては、頭目の「家名」が同様の場合がある。例えば大社、徳文、青山はDemalaladという同様の「家名」がある。その他に、賽嘉のPacekel（楊家）と三地のPacekel（包家）、そして青葉村のRuladengと馬児村のRuladengも同様である。これは「家名」の名付けの範囲が同じ集落内にあることを意味する。なお、同じ集落に複数の頭目家がある場合があるが、それはその集落において、複数の移転・合併が行われたからである。

さらに、表2は屏東県三地門郷賽嘉村のTailakingという集落の貴族と平民の「家名」を整理したものである。ここでは同じ集落に重複の「家名」は発生していないことが分かるだろう。注目すべきは、他の集落の頭目の「家名」がこの集落の平民家の「家名」になっている場合があるということである。このことは、まさに貴族と平民における「家名」の命名の規範と効力は、単一の集落に限ることを証明している。したがって、パイワン族人の身分は、その「個人名」、「家名」、「集落名」の三要素により構成されるのである。

表2 屏東県三地門郷賽嘉村の Tailaking 集落における「家名」

階級	貴族	平民
「家名」	Pacekel 頭目 (楊家) Dalapayan (江家) Ubalat (曾家) Pacengelau (鐘家) Gingelui (謝家)	Talimalauv (鄭家) Taukadu (楊家) Taiivatan (林家) Kuvanasan (鐘家) Ruluan (許家) Luladen (楊家) Karangian (梁家) Talulivak (劉家) Luvaniyau (鐘家) Maledeb (包家) Kavuaran (游家) Ravang (柯家) Palangui (馮家) Taruagai (閩家) Madiiling (阮家) Ruladeng (張家) Lalegean (藍家) Pacikel (邱家)
フィールドワーク実施地：屏東県三地門郷賽嘉村 実施者：曾有欽 実施日：2014年4月5日		

上記二つの表から分かるように、単一の集落において、貴族と平民の「家名」は重複しない。しかし異なる集落同士では、貴族と貴族、あるいは貴族と平民の間で「家名」は重複する可能性が高い。パイワン族は、その自己の名前によって地位が現されており、「家名」はその居住者によって序列が決まる。貴族や平民は専属の「家名」というものは持たず、個人名はその身分に適するものとなる。これらは、はっきりとした規定はないものの、慣習として一定の規準をもって作用している。

次の表3では、現存する貴族の「家名」Ubalat (曾家) の兄弟別の伝承を例として、「家名」の継承と誕生の背景を説明している。

表3 屏東県三地門郷 Ubalat 貴族家の「家名」の伝承一覧表

出生別	姓名	「家名」	「家名」の名付け過程の説明
長女	曾月英 Patagau	Ubalat	他の集落の男性に婿入りしてもらい、本家の側に新たに家屋を建てたが、家族の協議によりUbalatの「家名」をそのまま継承。
次女	曾月美 Selep	Taugadu	Taugadu家の長男と結婚し、Taugaduの「家名」を受けた。
長男	曾有欽 Pukiringan	Ubalat	長男は他の集落の貴族女子と結婚し、Ubalatの家屋と「家名」を継承。
次男	曾有光 Maicus	Mavaliw	Dalapayanという貴族出身の非vusam ⁴⁾ 女性と結婚し、新しい家屋を構築。Ubalat家により新しい「家名」Mavaliwとなった。
三男	曾有富 Giligilau	Ubalat	平民出身の非vusam女性と結婚したが、新しい家屋を構築せず。
四男	曾建雄 Ljaula	Ubalat	平民のRavang家のvusamの女性と結婚したが、妻側の家屋と「家名」は継承せず。Ubalat家により新しい家屋と「家名」が決定される予定。
三女	曾玉梅 Malaice	Ubalat	漢民族の男性に嫁ぎ、Ubalatの「家名」のまま、漢民族の呉家に入った。
フィールドワーク実施地：屏東県三地門郷賽嘉村 説明者：曾月英 実施日：2012年9月12日			

4) Vusam：第一子を指すパイワン語の言葉である。パイワン族にはvusam文化という第一子継承文化がある。

実際に、各一族の状況によって、その一族の「家名」の継承、そして新たな「家名」の創造は異なってくる。表3のUbalat一族の長女と長男は同時に「家名」を継承しているが、三男と四男は結婚して新しい家屋を建てたものの、新たな「家名」を作らずにUbalatの「家名」を引き続き使用している。現在のパイワン族社会において、新しい家庭を作っても新たな「家名」を作らずに、そのまま本来の「家名」を使う事例も増えている。これは漢民族の同宗族は同じ姓を持つという考えに影響された結果といえるだろう。

三、パイワン族の「家名」と「結婚頌詩」

次にパイワン族の伝統的な「家名」と個人名から、パイワン族の独特な文学形式を分析したい。以下の検討を通して、「家名」の詩歌は「男女情詩」sy pagagaljugalju、「結婚頌詩」sikipaukukuz、「部落頌詩」paketu、「家族頌詩」sisusuan ta kina laimaimaan、「亡者祭文」cangit、そして「家名記誦文学」sisusuan takina laimaiman（家名記憶文芸）など異なる分野の口承文芸のなかにも含まれることが分かるが、ここでは、まず「結婚頌詩」をみていく。

パイワン族の婚礼にiuljaljay「新娘童貞頌」（または、「貞節頌」。新婦貞操礼賛詩）がある。その内容は婚姻する女性がこれまで貞操を守ってきたこと、その模範的な姿、そしてその貴族や頭目としての高貴な階級身分を礼賛するものである。婚姻にあたり、女性としての品格を維持してきたこと、そして若かりし頃の青春と親族との別れという名残惜しさをアピールする。

「結婚頌詩」は二つの性質をもつ。まず、その詩歌は代唱者によって詠われるということである。女性の先輩者によって、花嫁の想いが代弁される。もう一つは婚礼中に参列者が斉唱できるように設計されているということである。以下、文字化した詩歌をもとに説明する。

1、「新娘童貞頌」aiyau

パイワン語：

1. aiya oi (虚詞) maliceng skeet ya o Uli venalengl aken palic malutamulang
2. aiya oi limarau nanu mi yang ya o Palingl su tangapui
3. aiya oi sudalat nanu mi yang ya o Kaselepan nu taruval
4. aiya oi kukina lingdian ya o miselem qataw ikalevelevang

和訳：

1. 高貴なるpaliceとmarutamulangの身の炸裂のために号泣する！
2. すべての栄光は、limarau頭目一族に帰する！ nanu mi yang ya o
3. すべての栄光は、sudalat頭目一族に帰する！ nanu mi yang ya o
4. 我が身は潔白で、よって空の果てにある太陽も暗くみえる。

[フィールドワーク実施地：屏東県三地門郷襄嘉村 説明者：鍾玉枝 実施日：2012年6月12日]

このaiyauいはいわん族のlaval族⁵⁾における「新娘童貞頌」である。新郎側は新婦の出迎えに来た際、同行の男性が家の外側を囲んで「勇士歌」curisiを歌う。女性の方はその輪の内側でこのaiyauいを歌う。この婚礼の規模や尊さをアピールするために、女性は歌う前に、必ず地元のTalimalauとDemalaladとの二つの頭目家の「家名」を賞賛する。curisiは急速で抑揚のある戦闘舞踊であるのに対し、aiyauい是比较的に柔らかく、男女の異なる気質が表現されている。aiyauいはいわん族の女性が男性らの前で自分の貞操をアピールするための歌である。奥ゆかしさと優美さを重視し、形容詞を多く使用しているのが特徴である。

四、パイワン族の「家名」と「部落頌詩」

Paketuは集落の精神と功績を礼賛する「部落頌詩」である。集落で行われる祝祭において、必ずpaketuが序曲として使用される。そのなかにtjagaraus⁶⁾大武山という神の名と頭目の「家名」が含まれており、歌詞とメロディーは神聖さと荘厳さにあふれているのが特徴である。以下、DaderavanとMavalivの二つの頭目の「家名」がメインとなる二つの「部落頌詩」を紹介する。

2、「部落頌詩」kazazalan⁷⁾

パイワン語：

tasa daderavan amen ; ky paukuz kipakaiv
 tasa daderavan amen ; pu kuku ta kudrkudrav
 tasa daderavan amen ; liguyin na yi palingulj
 tasa daderavan amen ; palingul yi taluval

和訳：

我が一族の「家名」はdaderavanだ。我々は最高の結婚儀礼と栄光を享受して。
 我が一族の「家名」はdaderavanだ。我々は無双の家宝kudrkudrav巨鳥を保有して。
 我が一族の「家名」はdaderavanだ。我々の威名がすべての集落の隅々まで届いている。
 我が一族の「家名」はdaderavanだ。我々の集落は河川を跨っている。

[出典：大武山宇宙的詩興頌（拉夫琅斯 2010年）]

上記の内容は万安という集落の「部落頌詩」だが、一貫して頭目の「家名」であるDaderavanを中心としている。ここからもパイワン族は頭目を核心としていることが分かる。頭目は集落の代表であり、頭目の権威と声望は集落全体

5) Laval：パイワン族の亜族である。パイワン族にはlavalとvuculとの二大亜族がある。

6) Tjagaraus：台湾南部の大武山である。パイワン族は大武山をパイワン族の先祖の起源する聖山としている。

7) Kazazalan：パイワン族の部落名（現在屏東泰武郷の万安村）。

のものでもある。つまり、貴族の「家名」はパイワン族の口承文芸に欠かせない重要な要素である。

次に、もう一つの平和村の「部落頌詩」を紹介する。これもまたその集落の頭目のMavalivを中心としている。この礼賛詩から、一人の頭目の地位と権威には、家屋、家名、領域、山河、婚姻、同盟、勇士、そして女子の尊さと貞操が含まれていることが分かる。「家名」はまさにそれらの要素の中心となるのである。

3、「部落頌詩」 piuma⁸⁾

パイワン語：

luljaljay⁹⁾ Ty saru mavaliv yitjen ; ana kycingul yi tagaraus
 luljaljay Ty saru mavaliv yitjen ; laliguyin nua pasainuanga
 luljaljay umaq a lja mavaliv ; dinelepan a tusurur ta taletar a qacilay
 luljaljay Selada su kaumaya tu lamavaliv akina cemekelan sasu avasy aken
 luljaljay Semu simuluq sun ta gadu ; a mangetjz a kipakim tanuaken
 luljaljay Ty saru mavaliv yitjen ; nupucekel kipaukuz sa kipakayiv
 luljaljay Matu vacal aken yi gadu ; akaizuzuan aika legerageraven
 luljaljay Kelu mare pasemalamalavy ; tuki pidanga su sini kisudu
 luljaljay Aku kina vavayanan ; temiselem a qadauv
 luljaljay Matu vacal aken yi gadu ; akaizuzuan aika legerageraven
 luljaljay Matu saviky a ken ; alededele anu kinasalinga
 luljaljay Kamatani aku salasalad aminnanga ken na mapausev
 luljaljay Tasalu mavaliv a ken ; aika tatapisin na uqalaalaay

和訳：

luljaljay 私は大武山の山頂に聳え立っているMavaliv一族の後裔だ。
 luljaljay 私は各集落の憧れのMavaliv一族の後裔だ。
 luljaljay 我々 Mavalivの家屋は、頑丈な石壁でできている。
 luljaljay 我々は侵されることを許さないMavaliv一族であることを、貴方はもう聞いているかも。
 luljaljay 貴方は私を嫁にもらうために、十の高い山を乗り越えて迎えに来た。
 luljaljay 私はMavaliv一族の出身で、婚礼は最高な格式で行うよ。
 luljaljay 私は透き通った湖水のように、ざざ波さえもない。
 luljaljay 誰の愛慕者と祝儀や贈り物が最も多いかを比べよう。
 luljaljay 私は透き通った湖水のように、ざざ波さえもない。
 luljaljay 私の身体は空の太陽が暗くみえるまで潔白だ。
 luljaljay 私は実ったピンロウのように可愛がられている。
 luljaljay 仲間に貞操を奪われたものもいるが、私は一人守ってきた。
 luljaljay 私はMavaliv一族の後裔だ。他人からの脅かしは許さない。

[出典：大武山宇宙的詩頌頌（拉夫琅斯 2010年）]

次に、「家名記誦文学」について説明する。これはパイワン族の中でも比較的特別な文学であり、現代人の発想を超えたものがある。「家名」の意味合いを表現しているだけでなく、「家名」をより覚えやすく伝承しやすいよう工夫

8) Piuma：パイワン族の部落名（現在屏東県泰武郷の平和村）

9) luljaljay：パイワン語の虚詞、とくに意味がない。

されている。その主な形式は、「家名」を連ねたあと、「家名」の間に接続詞や適宜な語彙を入れ、規則的に、そして韻を踏むなど、文章として整った「家名の物語」となっている。

4、「家名記頌文学」

パイワン語：

yizua ty Avujatjan a iljalvaljavatj yi cemecelem ; manu lemganda ta saravesav ; manu casav ty Paracasav ; sa agarangy ny Asagaran. manu mavuvuvur ty Vuvuvur ; au sy qaqivu tjay adjay, sadja'adjay ; au gemugu ty Pagugu. pay pastjurudj ty Saliljan sa alapen sa salilij apasatjay Cacavalj. Pay yizua ty Palimecelj, a namalimetjeljanga sa amaya. Aumangetjez ty Qunevnlj a qivu : vavayiu ! ury qemunevuljan na men aya ; pay mangetjez ty Rupavates ana emacu ta avatjes. Au yiaselaying drengedrengan ny Irengereng. Manu patalak ty Tinalak sa namare patalatalak. au masan galemegeman nanga ty Galemegem. Yizua ty Mavuvuvur a isan lvuvuvur, mayanga ty Patjeqan ana tjeljeqang sa amay. tuazua veleljeljem a qadav.

和訳：

野外でグアバを摘むAulatanという人がいるが、突然藪のなかから何か音がした。そしてParacasavが屋外に来たが、Asagalanに叱られた。すると、Vuvuvurがもやもやして、なぜかAdjayに蹴れと促した。なぜPaguguは犬の鳴き声を出すんだろう？ Salilangを不運にさせるためなのか？彼は他の人たちを追い払って畑で一人暮らしするようになり、Palimecelはその場で呆然としている。なぜQonivenは来るといいながら、出ていけというんだろう？我々はほこりを立て、するとRupavatesが箱を持ってきた。なぜIrengerengは道路で立ち止まるんだろう？まさかTinalakが嫉妬しているから、それで互いに嫉妬したんだろうか？なぜGalemlemanは激怒し、Mavuvuvulはもやもやしているのか？加えて、Pateangはずっと空を眺めている……

[出典：文樂部落家號記頌（拉夫琅斯 2010年）]

五、パイワン族の「家名」と「亡者祭文」

頭目と平民の間には、明らかな階級上の区別があるが、それは祭文のなかでも表現されている。祭文のなかに登場する「山崩れ、離散、高台」など尊さを表す表現は、頭目の祭文にのみ使用される言葉である。一般の平民に使われるのは、「家屋の傾斜、寂しい庭」などの表現となる。

祭文は二種類に分けることができる。一つは一般的な「祭文」cangitであり、もう一つは「家族頌」paketu ta upuである。「家族頌」は、故人の身分やその人間関係を賞賛することが主な内容である。これにより、葬儀の参列者に、故人の生前の地位を理解してもらうのである。また、鼻笛の演奏もあるが、これは頭目の葬儀にしか使われない。以下、頭目の祭文を部分的に引用しながら説明する。

5、「頭目追頌勢力祭文」

パイワン語：

Timanaasu kasalingayin tua sedalip ta qacev a ta sipamav ; timana a yinia ta sedameqy ta upu ; ay payuan yi taugadu ; ay padayin yi duluan ; vana yinia ta daluny?Azua vana su kasalingingyin vana su kavalavalayin ; timalemumu a qemavang ; tima lemumu asemavuta ; ay ka pay ka paqalay ay ka marekutj.

Akemasi viry a pate navalj tu yinuanga su sindalunananga ; ay paridryan yi talimarav, ay kaqaluan yi giring , ay kulalau yi tulivekkan, ay pulity yi rayan, ay tukuvul yi tarulivak, ay kazazalang yi kituvian, ay kaviangan yi zengrur, ay makazayazaya yi vavulengan ; anemanaan a su ka valavalayin

和訳：

どちらの頭目が貴方が婚姻関係を結びたい対象なのか？我々の家柄に相応しい頭目のなかで、まだ婚姻関係を結んでいないものはいるのだろうか？筏湾集落のTaugadu頭目、高燕集落のDuluan頭目、まだ我々と関係を結んでいないだろうか。どちらかが貴方が一生懸命婚姻関係を結びたい頭目家なのか？敢て占有や侵略し、畏敬の知らないものは誰なのか？

南から北まで、あらゆる集落の王族は貴方と関係と結んでいる。大社集落Talimalau頭目、東部正興集落Guling頭目、古樓集落Tulivekkan頭目、嘉興集落Rayan頭目、泰武徳文集落Tarulivak頭目、万安集落Kituvian頭目、往平集落Zengrur頭目、馮家集落Vavulengan頭目。次に望むのはどちらだろうか。

[出典：大武山宇宙の詩與頌（拉夫琅斯 2010年）]

故人のこれまでの勢力を賞賛することは、故人とその家族にとって、その意義は極めて大きい。この短い祭文でも、十にも及ぶ「家名」が使用されている。自らの一族と同等な地位にある一族との婚姻関係の成立については、パイワン族の集落の勢力の拡張は武力ではなく、婚姻を通して拡大していくことの証明である。実際に、パイワン族の各集落の歴史的伝説においても、ある集落が他の集落からの侵略をうけ滅亡したなどという事例はない。

六、結び

(一)「家名」という集落意識の創出

「家名」(kina laimaiman)は集落を構成する基本的な単位であり、頭目は集落組織の中心的な存在である。頭目の勢力が強ければ、貴族は栄え、集落は強大になり、経済的に発展し、文化も普及する。一つの家族には必ず「家名」があるが、頭目の「家名」の名声は集落全体の対外的な指標となる。そのため、「貴族史詩」、「家頌号賛」、「貴族神話」は集落の重要な文学の中身となる。それぞれの家屋は、その一族の歴史、祖先、発祥地、トーテム、生態環境の特徴などをもとに、自分の家屋に「家名」を名づけ、それが家族の紋章のようになる。頭目の「家名」は一般的に、有名な山河、英雄豪傑にまつわる語彙を使用しており、またその家屋には、ヒャッボダ、太陽、陶壺などが描かれた色鮮やかなトーテム柱などがあり、その家の象徴となっている。「家名」は単なる名称のみならず、その家屋の歴史や勢力範囲を表象する。つまり「家名」は集落史で

あり、家族史であり、生命の物語でもある。貴族の「家名」は集落意識や家系精神をつなぐ媒体でもある。

(二) 「家名」というパイワン文化の繁殖

パイワン族の伝統社会において、貴族の「家名」と個人名は、その人の身分、地位、そして家系を表すものである。貴族階級は結婚の際、双方の家柄や財産等が釣り合っているかを重視し、同一階級間の婚姻を理想的な婚姻形式とする。したがって、頭目の階級は常に近隣の部落の頭目との婚姻を通して関係を結ぶことになる。頭目は地主でもあり、土地、河川と猟場を所持しているが、婚姻関係を通して自分の領域を拡大することができる。階級の低いパイワン族人は、自分より階級の高い人と婚姻関係を結び、自己の身分階級の向上を望む。このような婚姻システムにおいて、階級の昇降が発生する。階級の観念は、財産と婚姻に表現されるのみならず、部落における「家名」や名前の創造や使用にまでもその範囲を決定づける。つまり、「家名」は、パイワン族文化と「第一子継承文化」vusamの伝承の役割を果たしている。

パイワン族は、その人の名前さえ分かれば、その人の階級や地位も把握できる。名前は当然ながら、頭目によって付与されることもあるが、自分の階級より高い名前や家号を使用するには、必ず頭目の同意を得なければならない。同じ部落においては、貴族も平民も頭目家の家号や名前を勝手に使用してはならず、ある程度定められた規準や伝承の制度がある。ただし、異なる集落間同士となると、特に厳格な制限はない。つまり、パイワン族は、その個人の身分は、「集落」、「家名」、「個人名」の三者から成立しており、「家名」はまさに、「見出し」の機能をもつのである。

(三) 「家名」からみたパイワン族文学の特徴

パイワン族の階級意識と貴族社会の価値観は、パイワン族文学をより豊かなものにさせている。特に「家族頌詩」sisusuan ta kina laimaimanは、貴族家系の「家名」の尊さと特別さを賞賛するものである。パイワン族の者ならば、みな個人の成就是問わず、必ず「勇士頌詩」、「結婚童貞頌」、「亡者祭文」、「祭祖靈頌」、「部落詩」によって、自分の「家名」を朗読し、礼賛するのである。

本稿で取り上げた「家族頌詩」は、価値ある古典文学といえる。特徴である貴族「家名」を繰り返して歌うことから分かるように、貴族階級はパイワン族口承文芸の中心であり、その「家名」から、家系の文学、貴族文学、部落の

歴史や個人の伝記など、より多くのパイワン族の文学を創造することができるのである。「家名」は一種の歴史典故であり、文化的な語彙である。そして、本稿では家号を連ねるという方法に基づく「家名記頌文学」は、非常に特殊な文学形式ということを明らかにした。

(四)「家名」による我々の物語

現代社会の波や「漢化」の影響で、パイワン族の若者の多くが部落を離れて都市に移住している。そのことから、新たに作られた家庭では、新しい「家名」を作らず、元々の家庭の「家名」をそのまま使うことになっている。このような現象が続けば、将来パイワン族が有する「家名」文化と第一子の継承文化は、漢民族同様の姓文化になってしまうと危惧してやまない。また、パイワン族の第一子以外の兄弟が別の家庭を作っても、本来の「家名」をそのまま使うことになれば、パイワン族の家系・系譜は混乱し、第一子の中核的地位も危ういのである。総じていえば、パイワン族は、「集落」、「家名」、「個人名」の三つの要素が合わさってこそ、そこに自己のアイデンティティが整い、価値ある強いものとなっていくのである。

「家名」はパイワン族の集落・民族・そして家系のアイデンティティである。「家名」は歴史であり、文化であり、文学である。それを守っていくためには、我々は「家名」を礼賛・記述することによって、我々自分の物語を書くのである。

参考資料

拉夫郎斯・卡拉雲様（2010年）。大武山宇宙の詩與頌。屏東縣政府。

曾有欽（2013年）。書寫作為方法——典藏排灣族古典情詩韻文。2013年全國原住民族研究論文發表會，國立嘉義大學。

臺灣大百科全書網站 網站 A P I 服務 <http://taiwanpedia.culture.tw/web/content?ID=11354>

中国語要旨

臺灣排灣族貴族家號與家族頌詩

排灣族是臺灣原住民族中人口數排行第二大的族群，部落原鄉分布在臺灣南部及東南部。排灣族有嚴格的階級制度，以頭目和貴族為尊，而這種階級意識和貴族社會的價值取向，豐富了排灣族的文學內涵。

「排灣族家號」和「家族頌詩」為本文關鍵詞，排灣族文學雖有多種形式，但本文界定凡在排灣族口傳文學中頌讚到家號者，即為家族頌詩。在此一定義上，本文針對許多文學作品進行分析，指出排灣族口傳文學裡的家族頌詩並不適合獨立分類，因為排灣族大部份的口傳文學，其本質就是貴族家號的禮讚和頌揚，這正是本文的研究目的和意義。

透過上述討論，本文進一步主張「家號」的存在，在排灣族社會中具有建立部落意識、繁衍傳統文化、彰顯文學特質、記錄我族歷史等維繫民族認同的功能。